

一足の山靴とザック、レインウェア、ツェルトと必要最小限の道具を買って山を歩き始めて1年半ほどになる。登れば呼吸が詰まり、歩けば腹が減る。この当たり前のことに驚かされる。くたくたに疲れきった体はそれでも、短い休息や食事に反応して元気を回復する。そんな単純なことに、また、喜びを感じる。そして再び歩き始める。森林限界を越えると視界を遮るものはなく、夕方、山は落日に赤く映え、夜、澄んだ空気のなかに星が輝く。遠くには街の小さな光が見え、それが混然となつて闇に溶ける。

積極的忍耐を要求する山は、「わたし」という存在が、大きな自然の中でいたって小さなものだとい

大きな自然の中で



やまもと たろう  
山本 太郎



真つ白なだれもない山は音さえなく、人間の存在そのものを拒絶するかのようだった。そこにそびえる。その姿は美しい。しかしそれと同時に、雪山は時として、大きな試練を人に与える。

2月中旬。一人の医師が西穂高独標付近で遭難死したという訃報を受け取った。独標からの下山途中、同行していた配偶者が200メートルほど滑落して動けなくなっ

地入りできたのは遭難2日後。発見されたとき、医師はすでに心肺停止状態だった。傍らには同じく凍死した妻の姿があったという。

医師は、動けなくなった妻のそばを離れることができず、一緒に亡くなったものと推定された。山が好きで、好きで、いつも二人で山に登っていたという。きっと雪山の山に魅せられながら。

雪の上に一人残されると、地球上に独りだけが取り残されたように感じるという。その話はヒマラヤの山々に数多く登った人から聞いたことがある。その後、真つ白な雪の中で、二人は何を考えていたのだろうか。

(長崎大学熱帯医学研究所教授)

うことを教えてくれる。夏の山、残雪の山、紅葉の山、それぞれが好きだ。そして今、雪山に憧れる。た。医師である男は、救助を要請したが、吹雪のため、救助隊の入山はかなわなかった。隊員たちが現